

石川地域づくり表彰 石川地域づくり賞

【団体部門】

大賞

●NPO法人 歴町センター大聖寺(加賀市)

大聖寺の歴史的遺産の保存、再生および活用を目的とし、平成 13 年にNPO法人として設立。「大聖寺川流し舟」の運航や時鐘堂の再建など、城下町としての趣が残る大聖寺の風情を活かした景観まちづくりに取り組んでいる。

優秀賞

●小立野地区まちづくり協議会(金沢市)

小立野地区の発展に寄与することを目的とし、昭和 56 年に設立。大石曳きを再現した祭り「御山まつり」の開催や、金沢の特色であり、昔からのコミュニティの場である広見の保存、広見を活用したイベントの実施などに取り組んでいる。

●特定非営利活動法人

能登半島おらっちゃんの里山里海(珠洲市)

金沢大学が開校した能登半島・里山里海自然学校の支援組織「珠洲サポート会」として平成 18 年に発足し、平成 20 年にNPO法人化。希少水生生物の保全を目的としたビオトープ田んぼによる休耕田の活用や、荒廃した里山林の整備によるきのこ山作りなど、奥能登地域における里山里海保全に取り組んでいる。また里山自然学校内に里山里海食堂「へんざいもん」を経営、地域の食育にも取り組んでいる。

●小木地区壮青年連合会(能登町)

青少年の健全育成を目的に昭和 60 年に設立。小木地区の基幹産業である漁業の後継者不足や少子高齢化が進み、伝統行事の存続など地域の活力低下が懸念される中で、近年は、健全育成の他に、外国人留学生や大学生を受け入れ「とも旗祭り」や「袖ぎりこ祭り」に参加・体験させるなど、地区の祭礼行事

を主体に地域の活性化へ向けた取り組みも行う。

奨励賞

●鳳至上町街づくり推進協議会(輪島市)

伝統あるものを活かしながら、住民主体の街づくりを進めるために、平成 14 年に設立。交流サロンいろは蔵の管理・運営、市無形文化財「三夜踊り」の街ながし、輪島大祭時に水幕・提灯を出し地域の一体感を出すなど、能登半島地震で被害を受けた建物の復旧を含めた街並み整備に取り組んでいる。

●野々市じょんから節保存会(野々市町)

野々市じょんから踊りを保存・継承するために昭和 35 年に設立。地域や小学校で講習を行い、「野々市じょんから節」の普及・継承や野々市じょんからまつりの実施などに取り組んでいる。

●クリーンビーチ内灘作戦(内灘町)

平成7年より、内灘町の地域資源である内灘海岸(砂丘)の清掃を中心に活動。平成20年からは、内灘砂丘の風紋再生に向け、竹垣づくり活動を開始。竹垣づくりにおいては、竹の間伐を行うなど、里山保全にも取り組んでいる。

【個人部門】

●数馬嘉雄(能登町)

能都町商工会(平成5年～)、能登町商工会(平成18年～)の会長を務め、地域資源の発掘・開発や宣伝などに尽力。能登の伝統的魚醤「いしり」のブランドを確立し、国内外におけるブランド価値の向上や販路拡大を図る。高品質で安全・安心ないしりの製造方法の研究、いしりに関する講演会、いしりを使った料理の提案などを行う。

■表彰経過および講評

谷本 互
審査委員会座長



【阿久澤部長（知事代理）】
「貴団体は、個性豊かな地域づくり活動を展開され、優れた成果をあげられました。よってここに表彰します。」
平成21年11月22日、石川県知事 谷本正憲

表彰された団体、個人の方、本当におめでとうございます。

「石川地域づくり表彰」は平成9年に創設されて2年に1回実施しています。今回で7回目です。地域づくり活動の一層の活性化を図るという目的で、今年度からは毎年実施することになります。

選考の経過をご説明します。審査会が平成21年10月22日に行われました。こちらの審査については、「先進性」「独自性」等々の基準から審査を行っています。

大賞の「NPO法人 歴町センター大聖寺」については、地域に根付いた独自な活動ということが高く評価しています。景観に対する深いこだわり、ローカルかつグローバルということで大賞にふさわしいと考えています。

優秀賞の「小立野地区まちづくり協議会」は、いわゆる都市内の資源とコミュニティとの結び付きを中心に長期間にわたり活動をされているということの評価しました。「能登半島おらっちゃんの里山里海」は、里山里海活動の拠点として地域と大学との連携を通して貢献する団体として、今後の活動の効果への期待も込めて優秀賞とさせていただきました。「小木地区壮青年連合会」は、従来からの地域のコミュニティ活動をモデルと考えたい、特に祭りの継続開催についての方法が地区の活性化と結び付くというユニークな実践ということで表彰しました。

続いて奨励賞の「鳳至上町街づくり推進協議会」は、能登半島地震以降の地区の資源として土蔵、あるいは町並みの再生、そして活用など、さらに伝統芸能の継承など諸活動に対して評価したいと思います。「野々市じょんから節保存会」は、地道な伝統芸能の継承団体として、「野々市じょんから祭り」をこの町を象徴するような祭りとして位置づけたということは功績にあると思います。「クリーンビーチ内灘作戦」は、砂丘に関わってきた先人の努力にならう素晴らしい活動の成果だと考えます。

個人部門の数馬嘉雄氏については、能登に伝わる魚醤「いしり」の普及の活動を中心に、地域のリーダーとしての活動ということでも、まさにキーマンです。長年の貢献と今後の活動への期待ということで、個人部門を授賞しました。

発表いただいた団体の活動、それからこういった活動についてヒントになるものが多数あると思います。本日お集まりになった皆様と地域づくりに関する情報を共有しまして、石川の地域づくり活動がより活発になりますことを祈念しながら講評を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。おめでとうございます。

石川地域づくり表彰 受賞団体・受賞者の活動報告

【団体部門】 大賞

NPO法人 歴町センター大聖寺

瀬戸 達 氏



大聖寺の瀬戸です。よろしくお願いします。
活動内容を全部話すと小1時間かかるので、最近、今一番やっていることを中心に5分にまとめます。来年(平成22年)の5月1・2日に「北信越町並みゼミ」という歴史的な町並みの大会をやります。その取り組みを紹介します。

今日は加賀市の一番南側の大聖寺というところから来ました。江戸時代の地図で、上の方にふにゃふにゃと曲がっているのが大聖寺川で、赤いところに武士が住んで、黄色いところに町人が住みました。水がつかないところに武士が住んで、あと埋め立てて町人が住んだという城下町です。ですから、「水がつくとどうなるか？」という、2階から下はみんな水です。これで「水もう嫌になった、まだ火のほうがいい」というようになります。火事になるとこうですね。これで大切な時鐘堂という鐘つき堂や高札場がみんな燃えてしまったので、我々NPOが中心になって一般の方の寄進で建てました。これは大聖寺にあります。左下の方にあるのは高札場です。

この画像は「第1回北信越町並みゼミ」の初日のプログラムです。まず、見てもらいたいの
が現存する下級武家屋敷、また、池泉回遊式大名庭園としての江沼神社の庭園。今、国指定文化財にさせていただけるように取り組んでいます。
藩政期の江沼神社の長流亭^{ちやうりゅうてい}の横を見た絵図です。右下の方にあるのが屋形船です。それで我々も屋形船をやりました。



2日目のプログラムは、午前中が北信越の村上、妻籠、熊川、大聖寺の報告です。北陸三県のあまり知られていない町並みを今調査しています。金沢大学や石川工業高等専門学校の学生といっしょにやっています。主に20の町が対象です。一番南が小浜。一番北が泊(朝日町)で、今日、学生が調査に行っています。今、七尾、輪島、門前については終わりました。こういった町並みを発表します。どのように発表するかといいますと、江沼神社の参道沿いに、夜店ならぬ各町の歴史的な町並みの写真を数十メートルにわたって設置します。例えば福井の今庄ですと木ノ芽峠、ここがちょうど木下藤吉郎が通ったり、織田信長が通ったところ。この一番上にある家が前川家です。また、新しくできた栃ノ木峠沿いの宿場で板取宿というものがこのように現存しています。町内には、京藤甚五

郎家などの文化財があります。このようなことを表舞台に出して、報告書その他に載せて、データが日本、または世界中へ回るような仕掛けをして、北陸三県の歴史的な町並みの問題点を究明しています。

2 日目の午後は、東京大学の西村幸夫先生に「北陸のまちなみ景観の取り組み」、そして元文化庁の監査官の刈谷勇雅氏に「文化財を活用した例」についてお話しいただきます。そして最後は、フランソワーズ・モレシャンさんの夫でフランス文化評論家の永瀧達治氏に、「なぜヨーロッパでは歴史的な町並みを子どものころから大切にするような土壌ができたのか」「日本は教育してもなぜそれが根付かないのか」という問題点を提起していただきます。これがパリの町並みです。

我々は大聖寺で子どもたちと一緒に景観広場

を整備して体験活動をしています。この画像は先週あたりの屋形船のところの秋の模様です。春になると「時代結婚式」という、江戸時代の嫁取り、結婚式を再現したものをやっています。そこで長持ち唄を歌いながら船が進みます。ちょっとさわりだけ歌いますね。

「ハァ〜今日はナァ〜♪」

こんな感じでやっています。当日は「加賀白山おったからまつり」が同じ境内で催されます。ぜひ、大聖寺に来てください。



【団体部門】優秀賞 小立野地区まちづくり協議会 能登 太一氏

皆さん、こんにちは。金沢市の小立野地区から参りました、小立野地区まちづくり協議会です。小立野地区まちづくり協議会は、昭和 56 年 6 月、今から約 28 年前に設立されました。当時、小立野地区ではいろいろな悩み事がありました。一つは金沢市の道路網整備による通過点化への不安。道路網が整備されて、小立野地区が通過点になってしまうのではないかという不安です。それから、金沢大学の移転による学生人口の減少。それと今でもそうなのですが少子高齢化の進行。こういったことが地域の課題として浮かび上がってきました。そこで、どうすればよいか、地域のにぎわいの必要性が議論されました。



そこでにぎわいを求めるために「御山まつり」という祭りを創設しました。その創設と同時に、この小立野地区まちづくり協議会が発足しました。小立野地区まちづくり協議会の構成メンバーは、町会、公民館、社会福祉協議会、児童館、婦人会、消防団、商店街連盟など地域の各種団体で、協働して活動を行う体制を整えています。また、地元企業、地元の小中学校、高校、大学の参加もあります。

活動内容はまず一つ、先ほども申しました、

「御山まつり」の開催があります。平成 21 年度の開催で 29 回目を迎えます。地域に氏子を持つ 5 社の宮司が御神輿とともに氏子宅を回り、自宅前で祈願を行う御山神輿の巡行。石引通りは、かつて金沢城の石垣を造るのに東部の戸室山から切り出した石を運んだ道です。その大石曳きを再現した「御山まつり」を毎年開催し、祭りを通して地域の伝統行事の継承、地域のにぎわい創出、地域住民同士の連帯感の醸成を行っています。



それともう一つはコミュニティ空間の保存活用です。金沢市における広見等のコミュニティ空間の保存および活用に関する条例に基づき、金沢の特色の一つである広見で、昔から小立野地区のコミュニティの場であった下馬広見を保存活用することについて、金沢市と平成 20 年 9 月に協定を締結し、住民、事業者、行政が一体となって広見の保存活用、地域コミュニティの活用に取り組んでいます。また、下馬広見に続き、平成 21 年 4 月に完成した石引の広見も金沢市と協定を結び、辰巳用水を引き込んだ親水ス

ペース、植栽、プランターを活用した地域住民の憩いの空間として快適に過ごせるよう広見の美化活動等の維持管理を行っています。

また、小立野の歴史・文化をテーマにした講演会を開催しています。小立野地区には加賀藩主・前田家ゆかりの菩提寺、天徳院、宝円寺、如来寺、経王寺をはじめとする寺院群があり、また、金沢美術工芸大学、金沢大学医学部、金沢商業高等学校など複数の学校がある文教地区でもあります。こうしたまちの特性や成り立ち、歴史を知る講演会で、地域への愛着心を深め、コミュニティの醸成を図りながら小立野地区の個性を生かしたまちづくりを行っています。

取り組みの成果と地域に与えている影響ですが、「御山まつり」は小立野地区が誇る伝統行事であり、この祭りを開催するにあたっては、各種団体、事業者が一致協力して企画から実施に至るまでの運営を担っています。祭りには地元の小中学校、高等学校、大学からのイベント出演や出展があり、学生らが多数参加してにぎわいを見せています。特に本年度の祭りでは、金沢大学保健学科の学生による「石引よろず保健室」という出張保健室の開催、金沢美術工芸大学、金沢商業高等学校の学生、地元小中学校の児童・生徒による踊りや器楽演奏などのステージが祭りを盛り上げ、地域住民と学生との交流の機会となっています。地元企業からは「御山まつり」に対し協賛企業として協力してもらっ



ており、特に地元の酒造メーカーが提供する天然水を使った「100 年水カルピス」が子どもたちには大盛況で、定番のイベントに定着しつつあります。

今後の展開については、小立野地区でも少子高齢化が地域の大きな課題となっているものの、時代に応じた祭りの開催を通して、時代に即応した地域振興を行う必要があると考えています。そのため、小立野地区の教育機関が多く集まる

文教地区であるという特色を生かし、学生のまちならではの取り組みを通じて、学校と地域が協働で祭りを創り上げていきたいと思っています。さらに、多くの地域住民に参画してもらうために、さまざまな職種・年代の方から担い手となるべく人材を発掘して、「御山まつり」、ひいては小立野地区の活性化につなげたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

【団体部門】 優秀賞
特定非営利活動法人
能登半島おらっちゃんの里山里海
赤石 大輔氏



「能登半島おらっちゃんの里山里海」で研究員をしている赤石大輔です。よろしくお願いします。皆さんご存じのとおり、能登は非常に美しい自然に恵まれています。今風の言葉でいいますと「生物多様性の宝庫である」。しかし、過疎高齢化が進む中、里山の景観が徐々に失われ、こういった美しい景観とともに生物多様性も低下してきています。また地域も徐々に疲弊してきています。金沢大学では、この生物多様性をいかに保全し、さらに地域活性に結び付けていくにはどのようにしたらよいか、といったテーマを持っていました。平成 18 年に三井物産の環境基金によって、能登半島里山里海自然学校を

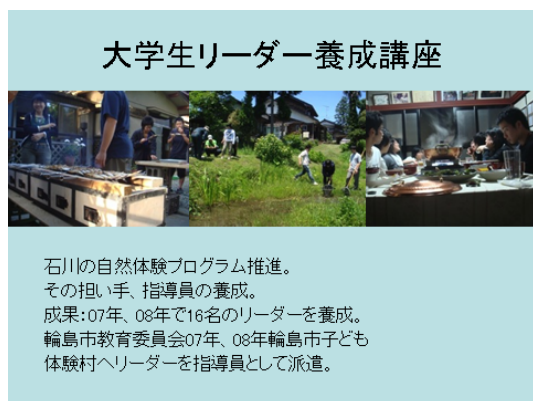
開校し、そこから地域と大学の協働という形で徐々に奥能登における取り組みが進んできました。そして、平成 20 年に、「能登半島おらっちゃんの里山里海」の法人化が認可されました。

活動内容としては、能登の地域における里山里海の保全活動を推進すること、また、里山里海を活用した製品の販売やオーナー制度等の普及、そして金沢大学との協働による里山プロジェクトの支援ということです。

主な取り組みは、まず、里山里海の調査研究で、金沢大学と協働して地域の里山里海の状態がどのようなものなのかという調査を行っています。また、徐々に荒廃しつつある里山を地域の力で保全していこうということで保全活動も推進しています。また、地域の里山里海を活用して、地元の子どもたちや、また保護者の方、そして金沢大学の学生等を地元に呼んできて保全体験をする中で、里山里海についてのリテラシーを向上するといった環境教育にも取り組んでいます。また、地域の食文化として食育の推進も行っています。

大学とNPOの協働の一例では、休耕田が増えていく中で、いかに農地を利活用していくかということで、水辺をビオトープ化して能登の希少な水生生物の保全を行っています。全国でも非常に貴重な水生生物、ゲンゴロウ類の生息

地として知られている奥能登の溜め池や棚田の保全ということで、地域のボランティアと共同で保全活動をし、また、大学の研究員と調査を行い、そのフィールドを使って地域の環境教育に活用しています。地域の保全活動を進める際に、ボランティアの呼びかけをしています。平成19年に発足して、現在106名登録者がいます。毎月第2・第4土曜日に定期活動を行い、ビオトープや森林整備をしています。



休耕田のビオトープで平成20年から無農薬による稲作も再開しました。ゲンゴロウやメダカなどが生息する美しい田んぼとそこで地域の方々と作るもち米を、私たちのNPOで、例えば今後は販売したり、イベントに活用したりといったことを考えています。

大学生に対する授業の取り組みについて紹介します。ビオトープを活用して能登の里山を紹介し、例えば彼ら自身がリーダーとなった場合に、次世代の子どもたちにどのような伝え方で里山里海を教えるか、伝えていくか、どのよう

な講義ができるかということと一緒に考えてプログラムを構築しています。そうしたプログラムを活用して、地元の子どもたち、また奥能登以外や、県外の小中学校の修学旅行等で活用した場合のプログラムも作っています。実際に各小中高校、他大学での実習、授業等でも活用されています。

もう一つは森林の整備です。里山を整備することで、奥能登では非常に親しみ深い里山のキノコがたくさん出るように、キノコ山の再生を行っています。また里山の整備を行う中で発生する木材を上手に活用するということで、燃料として薪ストーブの普及等もNPOで推進しています。NPOの活動をしている荒廃した雑木林をアカマツの多いキノコ山として再生しています。うっそうと生い茂った木をある程度間伐をして、そして地かき作業をすることで美しいアカマツ林に戻しています。そうすると、秋にはシバタケなどおいしいキノコが発生します。こういったフィールドを活用し、県外の方々をお呼びしてキノコ狩りの体験ツアーを実施しています。昨年、今年と非常に好評をいただきました。

先日、里山を保全している団体である東京のNPOグリーンウェーブさんに声をかけていただいて連携協定を結びました。珠洲の荒廃した里山にクヌギを植えて植林をして利活用し、さらにCO2の削減、そして将来的にはそれを活用した木質バイオマスの利用へということで、現在、珠洲市で植林活動も行っています。

これは里山食堂の「へんざいもん」といいます。「へんざいもん」は、珠洲市美岬町の方言で、この辺で採れたものという意味です。地産地消を目指した食堂の名前には非常にふさわしいものです。「へんざいもん」は地域のお母さん方を中心に運営しています。ある日の「へんざいもん」食堂ではどういったものが使われているの

か？子どもたちが給食で「へんざいもん」を利用した場合、例えば、「ごはんはどこで採れたもの」「煮物のシイタケは地域の農家さんから」、また「アジのフライは珠洲の漁師さんから分けていただいた」と説明します。地元の食材を使ってこれだけおいしいものができるということ、を、「地産地消」や「フードマイレージ」といったキーワードを使いながら食育の推進も行っています。大学の研究者と協働して行っている里山の保全活動の中では、調査研究の中から生まれてきた新しい知識や発見等を地域の方々に分かりやすく伝える、普及啓発のための冊子等も

作っています。また、講演会を開いて、キノコ山づくりの再生等のシンポジウム等も主催しています。

これからは、奥能登の里山里海を保全する取り組みを地域内外の交流を通して、さらに広めていきたいと思っています。課題としては、継続性を確保すること。大学、行政、民間等の支援をぜひともこれからもお願いします。また、里山里海を活用した地域振興策にいかに乗せていくのかということや、取り組みの拡大を今後の課題としています。

【団体部門】 優秀賞
小木地区壮青年連合会
林 誠氏



皆さん、こんにちは。小木地区壮青年連合会で事務局を預かっています林です。こちらが同じく広瀬です。

まず、小木地区壮青年連合会の立ち上げについて紹介します。古くから小木町は遠洋漁業基地として発展し、日本百景にも選ばれている九十九湾が沿岸航路の停泊地、避難港としても知られていたこともあって、人の出入が激しく、女性や子どもたちの安全を守る治安維持に向けて当時の中心町内の壮青年らが同志団を結成したのが始まりといわれています。今から 70 年ほど前の話になります。

昭和の後半になると、多くの家で父親が失業のため、長く家を留守にすることもあってか、小木の学校が大変荒れました。石川県内でも有数の悪ガキ校として知られ、こうした青少年の非行問題に向け、各町内会で壮青年団が形成され始め、昭和 60 年、青少年の健全育成を目的に、全 9 町内会の壮青年団から構成される小木地区壮青年連合会が設立されました。

次に小木町の現状についてです。かつては日本海側有数の遠洋漁業基地として、「3 年船に乗れば家が建つ」とまでいわれた時代もありましたが、経済水域 200 海里問題をはじめとする社会情勢の影響を受けて、昭和 50 年中ごろを境に基幹産業の漁業の衰退。漁業の最盛期をともに歩んだ旧県立水産高校小木分校の閉校、県指定無形民俗文化財である「伴旗祭り」をはじめとした伝統行事の存続への懸念など、地域全体の活力低下を招きかねない重い現実が現われ始め、地域の特色を生かした地域の活性化策が求められています。私どもはこうした現実を受け止めて、健全育成の他に、課題となっている地域の活性化へ向けた取り組みを始めたところです。

課題解消に向けての取り組みについて紹介し

ます。子どもは沿岸航路の停泊地遠洋漁業基地としての発展は、人、物、情報が交流する機会の場をつくり、これらが相乗して地域の活気につながっていたととらえ、人が交流する機会を設け、小木の町についてどんどん知ってもらうことをポイントとしました。また、住民の誰もが関わって、無理なく継続していくには、住民の気質に合った取り組みが前提であるとして、祭礼を主体とした地域振興策に取り組んでいます。秋祭り、「袖ギリコ祭り」への参加や、大学生の「伴旗祭り」制作体験の受け入れなどを行っています。また、設立当初からの目的である健全育成や地域行事への支援にも取り組んでいます。祭礼の運行、夜間パトロール、駅伝大会への参加などがあります。



ご存じの方もいらっしゃると思いますが、この画像は5月に行われる「伴旗祭り」です。高さが30メートルほどあって、旗などは毎年作り替えています。「伴旗祭り」の制作体験は県内大学のゼミ生が取り組んでいます。地元の小木中学校の生徒との共同作業をしています。地元では三角形の金銀の紙をべたべた貼る作業を「ベ

タ金貼り」といいますが、共同で作業をしています。

こちらは中学生との記念撮影です。作業していた旗を横にしての撮影です。地域の先輩に祭りの歴史や祭りと住民とのかかわりなどを説明してもらっている写真です。伴旗祭りや漁船の移り変わりの資料を見ているところです。こちらは女子学生の記念撮影ではなくて、イカ釣り漁船、私たちが通称「100 トン」といっている船です。船内を見学をしている写真です。デッキ、操舵室、機関場を見学しました。

九十九湾の遊覧になります。

こちらは9月の第3土、日曜に行われる「袖ギリコ祭り」です。こうした横長の行灯のギリコについては能登では大変珍しく、小木の住民のセンスの一つの表れであるともいわれています。秋祭り、「袖ギリコ祭り」の参加者に対して、町内の責任者が説明している画像です。最初は曳き手としての参加なのですが、責任者が安全と判断しますと、即戦力としてすぐに中に入って押し手に回っていただくこともあります。

こちらは内浦時代から続いている駅伝大会の集合写真です。

最後にまとめとして、勝手な考えになりますが、地元の住民が子どもから大人へと成長する過程で経験してきた「伴旗祭り」をはじめとする祭礼を地域振興策の主体としたことは、地元の住民の結束と郷土愛を強め、地元主体型のまちづくりへの機運を醸し出すきっかけになっていると思います。また、小木の子どもたちは保育園から中学校までは全く同じメンバーで、高校へ進学したときに初めて小木以外の同級生ができるといった環境下にあります。そうした意味で、学生との交流は町外の同世代との交流に乏しい地元の子どもたちにとっても貴重な交流のきっかけになっていると思います。保育園児をはじめ小中学生の太鼓や笛の指導は、指導す

る私どもも含め、地域の魅力を再発見するきっかけにつながっているのではないかと考えています。

今回いただいたこの「石川地域づくり賞」は、携わってきた者にとって非常に励みになりますし、まだまだ私たちが気付いていない独自の文化、そこにしかない資源があるかと思っています。

【個人部門】

数馬 嘉雄氏(能登町)



皆さん、こんにちは。数馬です。今日は個人賞という形でいただきましたが、本当のところは、能登町商工会はじめ、「いしり」の事業に携わった皆さんの代表でいただいたのだと思っています。

日ごろから我々は「能登半島の魅力というのは何か？」ということを考えています。祭りのような宝もあり、また、自然豊かな里山里海もあると思いますが、そんな中で私たちは「いしり」「なれずし」「地酒」「干物」、それから「魚の糠漬け」という発酵食品も大切な宝物の一つだと思っています。

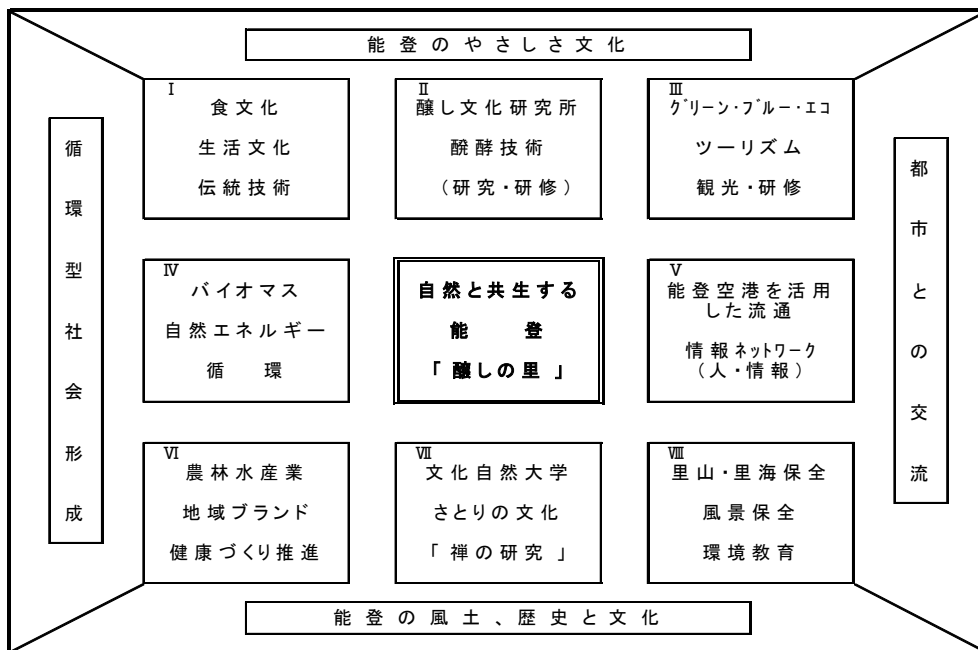
そして、能登には伝統的な発酵食品の他に、能登杜氏といわれる発酵に携わる人もいます。そしてもう一つは、門前にある總持寺、それから中井、金蔵の寺院群、それから能登半島全体をぐるっと回る能登国三十三観音というように、心を醸成するような地かなと思っています。そ

今後も頑張りすぎず、さぼりすぎず、独創性に満ちたさまざまなきっかけづくりに取り組み、地域が少しでも元気になるよう恩返しができればと考えています。拙い話となりましたが、小木地区壮青年連合会の活動発表とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

ういう意味では、一つのキーワードは「醸す」だと思い、その「醸す」という言葉を大事にしながらいろいろな活動をしています。そんな中で、能登町の地元には「いしり」という素晴らしい宝物がありました。イカの内臓を発酵させた魚から造った醤油です。それをテーマに、地域が少しでも元気になるようにということで事業を起こしました。

魚醤は世界にもいろいろあります。「いしり」の仲間と書いてあります。日本にも秋田の「しょつつる」、それから香川県、瀬戸内海にある「いかなご醤油」、そして、能登の「いしり」という、この三つが日本三大魚醤といわれています。その他にも福井県の方にはいろいろな魚から造った「ととだし」というものもありますし、高知の方へいくとカツオで魚醤を造るというものもあります。

三大魚醤の中でも圧倒的に生産量が多いのは「いしり」ですが、知名度を調べると圧倒的に秋田の「しょつつる」に遅れをとっています。それから、皆さんよくご存じだと思いますが、アジアの方へ行くとタイの「ナンプラー」、ベトナムの「ニョクマム」が非常に知られています。日本国内の消費においても、日本の魚醤よりもニョクマム、ナンプラーが使われているというのが現状です。「これでは駄目だ」ということで、何とか「いしり」を少しでも皆さんに知っていただき、地域の活力の一助にできないかと事業



いしりの旨味と機能性

- いしりの旨味**
 いしりは、高濃度の食塩の添加により、腐敗細菌の繁殖が抑制され、自己消化酵素によるタンパク質の分解や自然発酵がなされて、独特の香気や旨味成分が生成されるのです。グルタミン酸、アスパラギン酸、アラニン、グリシン等旨み成分である遊離アミノ酸の宝庫。
- いしりの機能性**
 いしりには、タウリンや、低分子のペプチドも多く含まれ、血圧上昇抑制作用や抗酸化性を示す物質が含まれていることが確認されています。



を開始しました。

「いしり」には成分的にグルタミン酸、アスパラギン酸、アラニン、グリシンという非常にうまみ成分の高い優良アミノ酸が豊富に含まれています。うまみ成分だけではなく、タウリンやペプチドが含まれていて、その中で血圧の上昇を抑制する作用や、酸化を防ぐ抗酸化作用があることが分かってきています。この二つにも着目しました。

私たちは国の事業である「ジャパンブランド育成事業」にエントリーして、「いしり」を国内外に発信しようと、需要拡大につなげようと考えました。さらに世界の方に評価をしてもらって、外からの評価を私たちの地域に持ち込むことで、住民のみんなが「いしりはすごいんだ」と自信が持てないか、誇りに思えないか、また、

反対に外から刺激を受けることで、もう一度自分たちのものを再認識できないかと考えました。この「ジャパンブランド育成事業」は、田舎の地域のブランドを日本のブランドとして国内外に発信しようという事業です。

私たちは、一つは「知ってもらう」、二つ目は「使いやすくする」、三つ目は「楽しみをつくる」という三本柱で事業を展開しました。

「知ってもらう」というのは、国内では生産量が圧倒的に多いにもかかわらず知名度が低いということもあったため、国内外、東京、ニューヨークをはじめとしたフードショーに出展し、皆さんに「いしり」に触れていただきました。

今年(平成21年)の2月に東京都の国際フォーラムで「世界料理サミット」が開催されました。世界から一流のシェフが一堂に会して、勉強会をするというサミットでしたが、そこにも「いしり」を持ち込み、皆さんに味わっていただきました。このときはポテトスープに「いしり」の風味を加えて、輪島塗の器でお出ししました。海外の皆さんから非常に好評を得たと思っています。そういう形で、まずはいろいろな食品のフードショーに出展をしました。

それから、実際に食べていただくために「い

しり料理を楽しむ会」を地元・能登やニューヨークで開催しました。能登で開催したときは道場六三郎さんに6品ほど「いしり」を使った料理を開発していただき、それを地元の調理人さんをはじめお客様に味わっていただきました。ニューヨークでも和食レストランで「いしり」を使った料理をシェフの皆さんに味わっていただきました。そのおかげもあり、今でもニューヨークのレストランで「いしり」が使われていることも大きな成果だと思っています。

それから二つ目、「使いやすくする」ということです。「いしり」はうまみ成分も濃いのですが、塩分が25%程度で大変塩分濃度の高い調味料です。それをもっと使いやすい形にして、新製品を開発することをテーマに取り組みました。

「いしり」と醤油を合わせた「いしり醤油」「いしりポン酢」「いしりおろしドレッシング」など、各家庭で直接使えるような商品の開発にも取り組みました。また、パスタに使ったり、カルパッチョに使ったり、チャーハンに使ったりと、「いしり」の特色を生かした、日本食だけでなく、いろいろな国の料理にも合わせられるような料理提案も行っています。

それから三つ目、「楽しみをつくる」ということでは、「いしり」の粉末化や、「いしり」の抗酸化性や血圧上昇を抑制する、作用するという機能に着目して、サプリメントの開発に取り組んでいます。こういう三つの柱で、「いしり」を少しでも皆さんに知っていただく、それから使っていただくことで、地域の元気再生になればと思っています。

この事業とは別の経済産業省の事業ですが、民間企業、我々のような商工会、そして県立大学、それから県の工業試験場、水産総合センターでコンソーシアムを組み、「いしり」のサプリメント化を進めています。これまでの調味料という範疇から、医薬という新たな分野を開拓す

るということで、「楽しみをつくる」「需要を増やす」という取り組みをやっています。

今後の取り組みとしては、「世界一のいしりを作ろう」とてっぺん（目標）を高く設定してやっていきます。成分面にも安全面でも、できるだけ安全に醸造できる、そしてアミノ酸を含めた機能性も十分高めることができるという高品質の「いしり」の製造にも、先ほどのコンソーシアムを中心に取り組んでいます。これからは、「いしり」単体ではなく、能登の食材もいっしょに組み合わせたような提案を行いながら、「いしり」を皆さんに広めていこうと考えています。

「いしり」は能登の地域で10社程度が造っていますが、品質にばらつきがあると、これからのブランド化に向けて大きなマイナスになりかねません。そこで生産組合をぜひ設立したい、またそのお手伝いを商工会がさせていただければと思っています。みんなで取り組むことで品質がある程度の水準を保たれるということと、これからの販促を含めた活動にはやはり自分たちの努力も必要だということで生産組合を立ち上げたいと思っています。いずれにしても、「いしり」を含めて発酵食品というものを、一つの能登の宝物、切り口として、また能登が元気になればいいなと思って活動しています。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

ジャパンブランド育成事業 「いしり ishiri」

・ジャパンブランド育成事業「いしり ishiri」(2005年～8年)

1. 知ってもらう: 認知度アップ
・国内外のフードショーへの出展(東京、NY)
・「いしり料理」を楽しむ会の開催(能登、NY)
・情報の整理・収集と発信「いしり物語」等
2. 使いやすくする
・新製品開発と料理提案
3. 楽しみをつくる
・新分野(医薬等)への可能性調査

※世界一のいしり作り
(高品位いしりの製造)
※能登産素材との組合せ
※生産組合の設立

